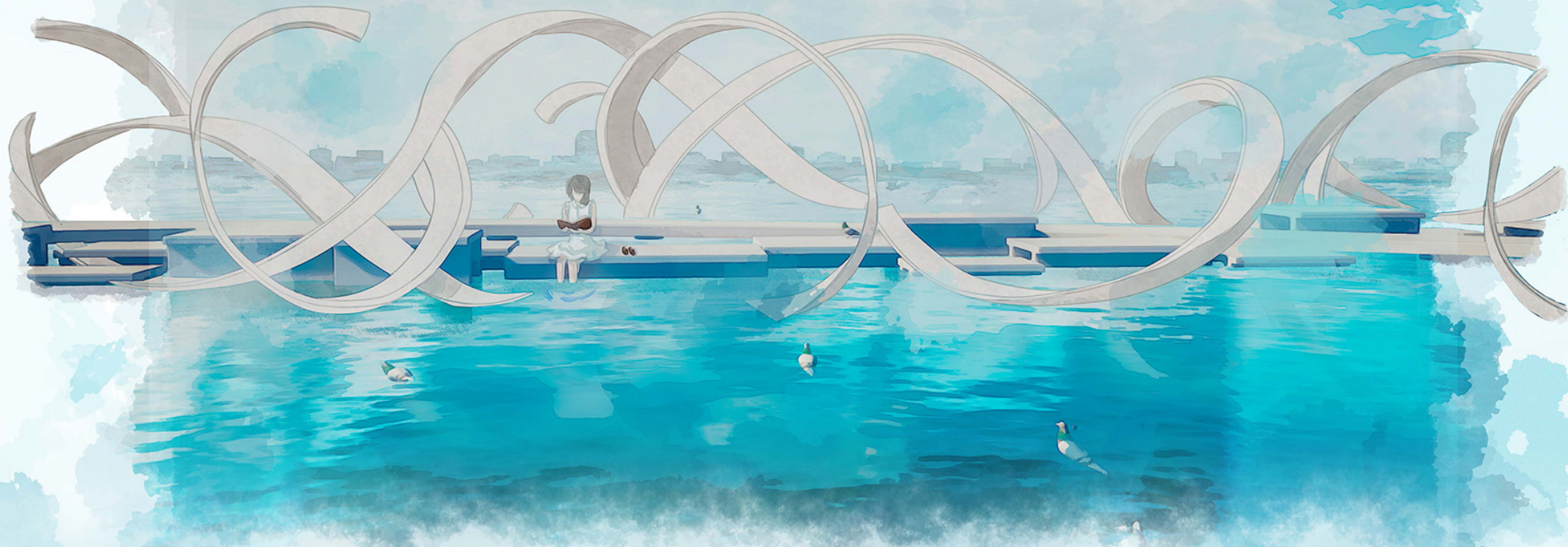


風道



concept

1. 近畿の水脈、Mother Lake などと呼ばれ、人々の命の源である琵琶湖
近代化に伴う汚染問題を長年抱えてきました
近年は様々な取り組みが実施され、回復傾向にあります
それでも依然として地球温暖化による水面上昇や水位低下などの問題が存在します
何より活動しているのは一部の人間だけで、多くの人がいまだに琵琶湖に無関心です
この湖をより良い場所にするためには、
湖に生きる人々が環境問題に取り組むのを先、
琵琶湖と共存する未来を考えていくことではないでしょうか…

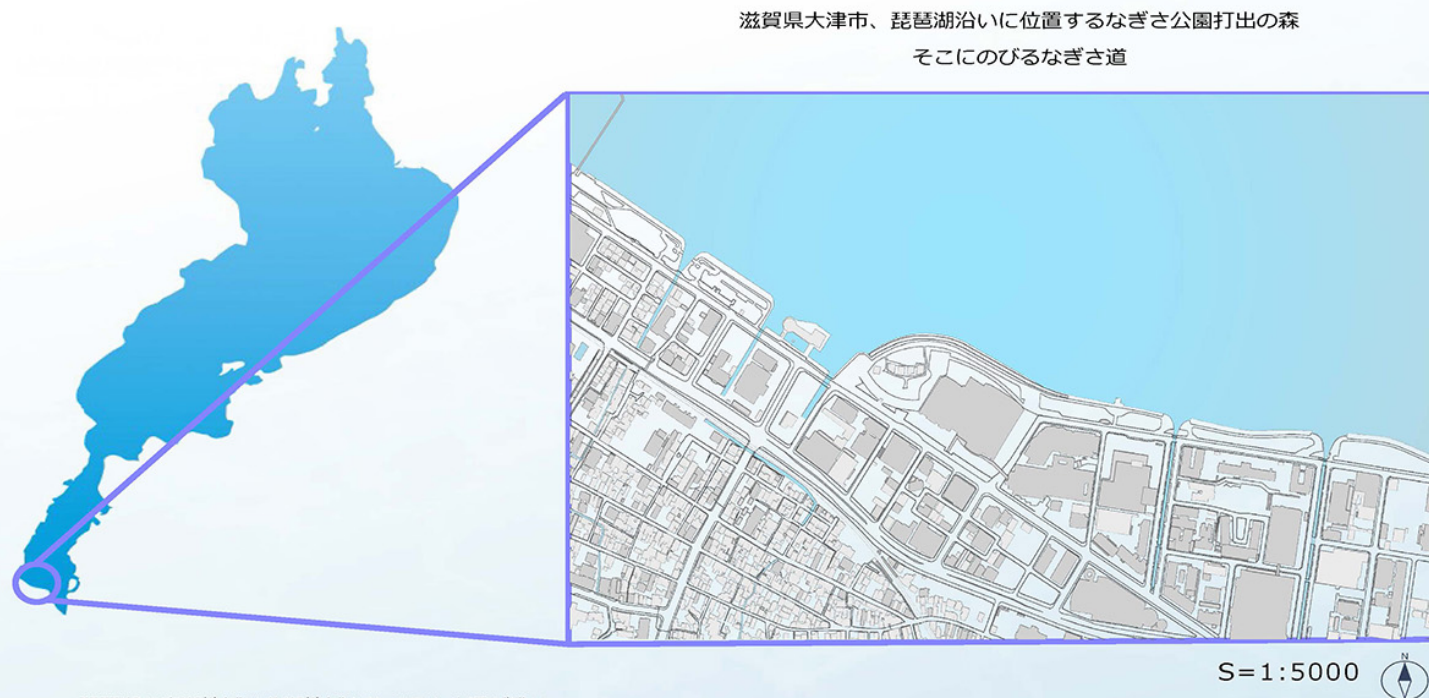
琵琶湖には人間の他にも魚や鳥など数多くの命が琵琶湖の恩恵を受けています
彼らの存在を認知し、受け入れること
それが琵琶湖との共存につながります

2. 今回の卒業設計では湖の中に人、魚、鳥の居場所を提供し
琵琶湖に生きる生き物の共存のカナチを回ります

建築は人と自然を繋げるツール 道は目的までの過程であり選択肢

例えばお昼の休憩時間や学校、仕事の帰り
毎日の散歩や、家族で遊びに来たとき
忙しいだろうけど、少し寄り道をしませんか
一人一人が今の琵琶湖という自然に対して何ができるのか
この「道」を通して考えること

place

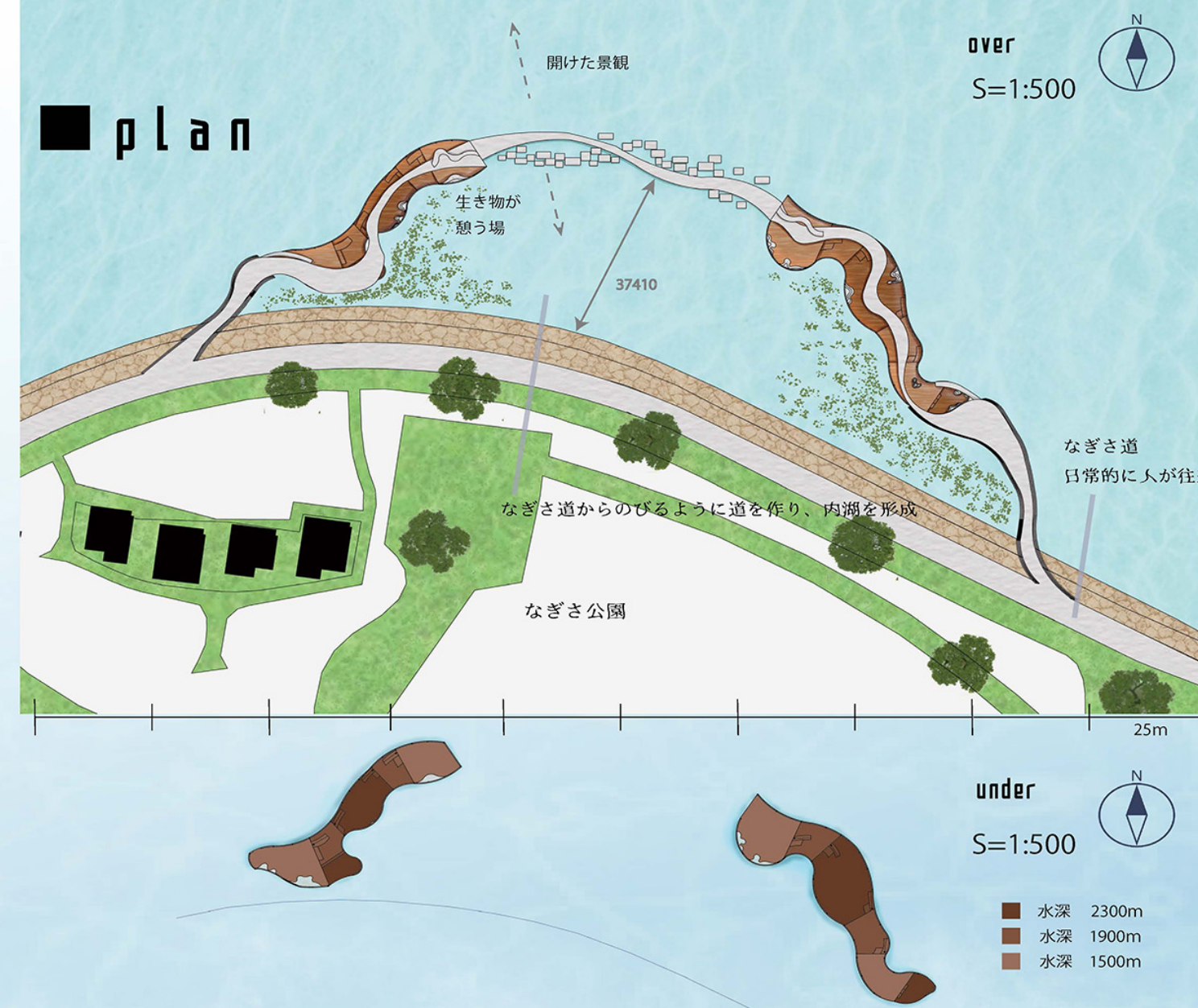


琵琶湖の南湖地域は北湖地域と比べると水深が浅い
街の人口も多く、滋賀の中では都市機能を有する場所が多い
その分、環境問題は深刻化している地域でもある

公園内を貫くなぎさ道は散歩や釣り、子供の遊び場など
日常的に人々に利用され、親しまれている場所です

この場所は滋賀県大津市のほぼ中心に位置しながら
主要道路から離れた
人工的な騒音が無い
生き物の音が響く場所

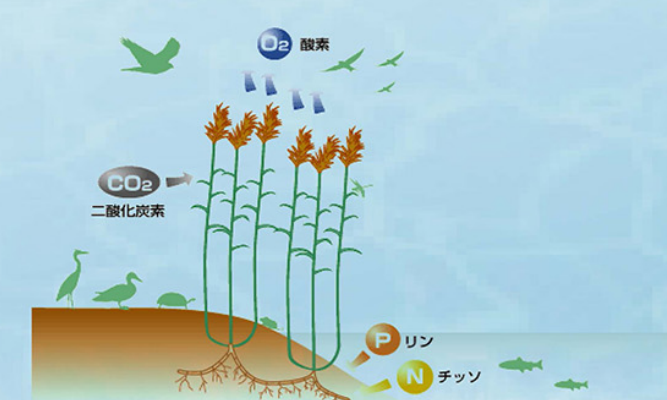
plan



さっさと同じような道？
でもさっさととは何か違う気がする…

environment

- 内湖の
・琵琶湖の魚の通り道を作る
⇒釣りスポットを意図的に作ることで外来魚の駆除を促進させる
- ・ヨシ地帯の管理がしやすい
⇒無秩序な繁殖を抑制
刈り取りやその後の再利用につなげる
- ・水の流れを抑える
⇒生き物にとって安心できる場所の提供
腐敗の堆積により水質浄化を促進
- ・人の手が過度に加わることで存在維持が可能
⇒ヒトと湖の共存のカナチ



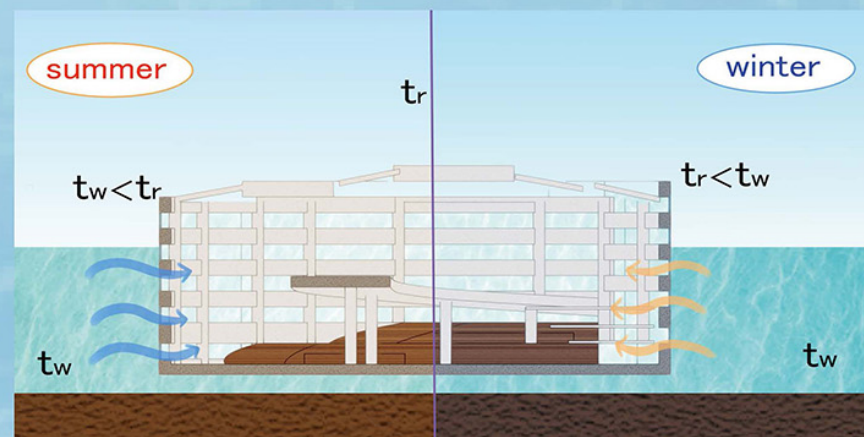
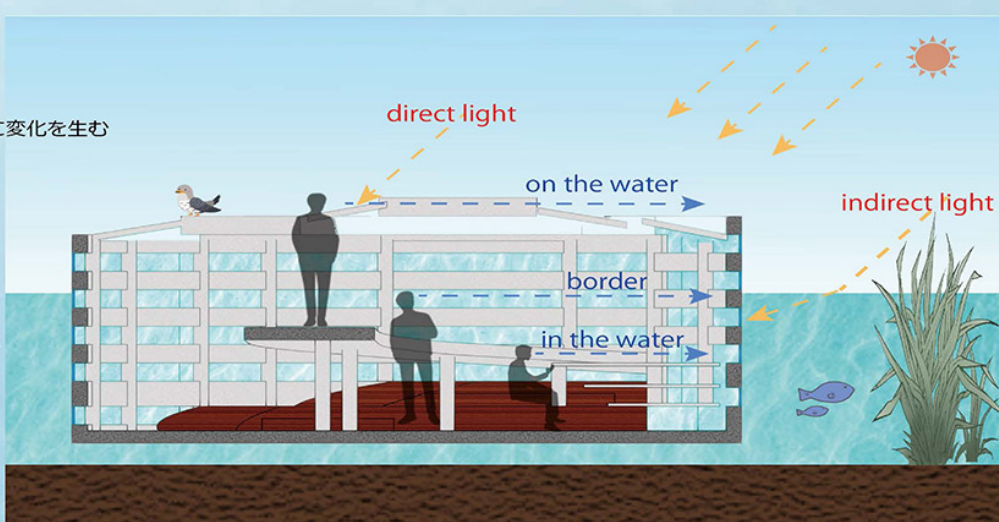
ヨシについて
・CO₂削減
⇒ヨシは盛衰に急速に成長するとともに、空気中のCO₂を吸収します

・生態系の保全
⇒ヨシ群落には多くの魚の卵が産みつけられ、卵から孵った稚魚はヨシの中を餌場や隠れ家として育つ
琵琶湖を棲家とする数多くの鳥も産卵、育成の場として利用する

・水質の浄化
⇒ヨシは、成長期に「富栄養化」の原因であるリンや窒素を栄養として吸い上げます
※富栄養化…湖沼等の水中に溶けている窒素、リン等の栄養塩類が多い状態
富栄養化が進むと、植物プランクトン等の異常繁殖によって赤潮、アオコの発生に繋がる
水の流れを弱くし、水の汚れを体積させる
ヨシの水中の茎につく微生物や群落の土中の微生物によって水の汚れを分解する

diagram

道の中では断面的な高低差を作ること、視界に変化を生む
上の道→立っ状態では水面の境目
下の道→立つ状態では水面の境目
座ると水中が目に入る



水中の温度は外気の温度と比べて大きく変動しない
よって夏は水温が外気温より低く
冬は水温が外気温より高い

夏は涼しい、冬は暖かい空間が生まれる
人の快適温度には達しないが、散歩や休憩の過程
においては気の安らぐ一時を提供する

なぎさ道からのびる風道
徐々に琵琶湖の中に滑っていくような傾斜

高低差が生む視界の変化
見えているのは対岸？水鳥？水中の魚？

魚の通り道

水深：2500

S=1:100

2つに分かれる道
湖ならではの開けた景観や
うっすら見える対岸を維持

水鳥の全反射によって
まるで湖の上を歩いているよう

外からは全く見えない
湖の中であっと休憩できる
お気に入りの場所

全体的に透け感を意識した透形
湖の風が吹く生命の波
琵琶湖という大自然を体感する道

なぎさ道の新しいカタチ
木が
魚が
鳥が
植物が
居心地のいい場所
人も自然の一部

鳥が水中に潜るのは魚をとるため
もしかしたら魚を捕まえる瞬間が
見れるかもしれない